

不思議な島

芥川龍之介

青空文庫

僕は籐とうの長椅子ながいすにぼんやり横になつてゐる。目の前に欄干らんかんの
あるところをみると、どうも船の甲板かんぱんらしい。欄干の向うには
灰色の浪なみに飛び魚か何か閃ひらめいている。が、何のために船へ乗つた
か、不思議にもそれは覚えていない。つれがあるのか、一人なの
か、その辺へんも同じように曖昧あいまいである。

曖昧と云えば浪の向うも霧もやのおりてゐるせいか、甚だ曖昧を極
めてゐる。僕は長椅子に寝ころんだまま、その朦朧もうろうと煙けむつた奥
に何があるのか見たいと思つた。すると念力ねんりきの通じたように、
見る見る島の影が浮び出した。中央に一座の山の聳えた、円錐えんすい
に近い島の影である。しかし大体の輪郭りんかくのほかは生憎あいにく何もは

つきりとは見えない。僕は前に味をしめていたから、もう一度見たいと念じて見た。けれども薄い島の影は依然として薄いばかりである。念力も今度は無効だったらしい。

この時僕は右隣みぎとなりにたちまち誰かの笑うのを聞いた。

「ははははははは、駄目だめですね。今度は念力もきかないようですね。ははははははは。」

右隣の籐椅子とういすに坐っているのは英吉利人イギリスらしい老人である。顔は皺しわこそ多いものの、まず好男子と評しても好い。しかし服装はホオガスの画えにみた十八世紀の流行である。Cocked hat と云うのである。銀の縁ふちのある帽子ぼうしをかぶり、刺繡ぬいとりのある胴衣チョッキを着、膝ぎりしかないズボンをはいている。おまけに肩へ垂れているの

は天然自然の髪の毛ではない。何か妙な粉をふりかけた麻色の縮れ毛の鬘である。僕は呆氣にとられながら、返事をする事も忘れていた。

「わたしの望遠鏡をお使いなさい。これを覗けばはつきり見えます。」

老人は人の悪い笑い顔をしたまま、僕の手に古い望遠鏡を渡した。いつかどこかの博物館に並んでいたような望遠鏡である。

「オオ、サンクス。」

僕は思わず英吉利語を使った。しかし老人は無頓着に島の影を指さしながら、巧みに日本語をしゃべりつつ指さした袖の先にも泡のようにレエスがはみ出している。

「あの島はサツサンラップと云うのですがね。綴りですか？ 綴りはSUSSANRAPです。一見の価値のある島ですよ。この船も五六日は碇泊しますから、ぜひ見物にお出かけなさい。大学もあれば伽藍もあります。殊に市の立つ日は壮観ですよ。何しろ近海の島々から無数の人々が集まりますからね。……」

僕は老人のしゃべっている間に望遠鏡を覗いて見た。ちようど鏡面に映っているのはこの島の海岸の市街であろう。小綺麗な家々の並んだのが見える。並木の梢に風のあるのが見える。伽藍の塔の聳えたのが見える。靄などは少しもかかっていない。何もかもことごとくはつきりと見える。僕は大いに感心しながら、市街の上へ望遠鏡を移した。と同時に僕の口はあつと云う声を洩

らしそうになつた。

鏡面には雲一つ見えない空に不二ふじに似た山が聳えている。それは不思議でも何でもない。けれどもその山は見上げる限り、一面に野菜おほに蔽おほわれている。玉菜たまな、赤茄子あかなす、葱ねぎ、玉葱たまねぎ、大根だいこん、蕪かぶ人參にんじん、牛蒡ごぼう、南瓜かぼちゃ、冬瓜とうがん、胡瓜きゅうり、馬鈴薯ばれいしょ、蓮根れんこん、慈くわい姑わい、生姜しょうが、三つ葉——あらゆる野菜に蔽おほわれている。蔽おほわれている？ 蔽おほわ——そうではない。これは野菜を積み上げたのである。驚くべき野菜のピラミッドである。

「あれは——あれはどうしたのです？」

僕は望遠鏡を手にしたまま、右隣の老人をふり返つた。が、老人はもうそこにいない。ただ籐の長椅子の上に新聞が一枚ほう抛り出

してある。僕はあつと思つた拍子ひょうしに脳貧血が何か起したのであろう。いつかまた妙に息苦しい無意識の中に沈んでしまった。

×

×

×

「どうです、見物はすみましたか？」

老人は気味の悪い微笑をしながら、僕の側へ腰をおろした。

ここはホテルのサロンであろう。セセッション式の家具を並べた、妙にだだっ広い西洋室である。が、人影ひとかげはどこにも見えな
い。ずっと奥に見えるリフトも昇のぼったり降くだったりしている癖に、

一人も客は出て来ないようである。よくよくはやらないホテルらしい。

僕はこのサロンの隅の長椅子に上等のハヴァナを啣くわえている。頭の上に蔓つるを垂らしているのは鉢植えの南瓜かぼちゃに違いない。広い葉の鉢を隠したかげに黄いろい花の開いたのも見える。

「ええ、ざっと見物しました。——どうです、葉巻は？」

しかし老人は子供のようになちよいと首を振ったなり、古風な象ぞ牙うげの嗅煙草かぎたばこ入れを出した。これもどこかの博物館に並んでいたのを見た通りである。こう云う老人は日本は勿論もちろん、西洋にも今は一人もあるまい。佐藤春夫さとうはるおにでも紹介してやったら、さぞ珍ちんち重ようすることであろう。僕は老人に話しかけた。

「町のそとへ」ひとあし 足出ると、見渡す限りの野菜畑ですね。」

「サツサンラップ島の住民は大部分野菜を作ります。男でも女でも野菜を作ります。」

「そんなに需要があるものでしょうか？」

「近海の島々へ売れるのです。が、勿論売れ残らずにはいません。売れ残ったのはやむを得ず積み上げて置くのです。船の上から見えたでしょう、ざっと二万呎フイットも積み上っているのが？」

「あれがみんな売れ残ったのですか？ あの野菜のピラミッドが？」

僕は老人の顔を見たり、目ばかりぱちぱちやるほかはなかつた。が、老人はあいかわらず不相変面白そうにひとり微笑している。

「ええ、みんな売れ残ったのです。しかもたった三年の間にあれだけの嵩かさになるのですからね。古来の売れ残りを集めたとしたら、太平洋も野菜に埋うづまるくらいですよ。しかしサツサンラップ島の住民は未だに野菜を作っているのです。昼も夜も作っているのです。はははははは、我々のこうして話している間あいだも一生懸命に作っているのです。はははははは、はははははははは。」

老人は苦しそうに笑い笑い、茉莉花まつりかの匂においのするハンカチーフを出した。これはただの笑いではない。人間の愚ぐを嘲ちやうろう弄する悪魔の笑いに似たものである。僕は顔をしかめながら、新しい話題を持ち出すことにした。

僕「市いちはいつ立つのですか？」

老人「毎月必ず月はじめに立ちます。しかしそれは普通の市です。臨時の大市おおいちは一年に三度、——一月と四月と九月とに立ちます。殊に一月は書入れの市ですよ。」

僕「じゃ大市の前は大騒ぎですね？」

老人「大騒ぎですとも。誰でも大市に間に合うように思い思いの野菜を育てるのですからね。燐酸肥料りんさんひりようをやる、油滓あぶらかすを

やる、温室へ入れる、電流を通じる、——とてもお話にはなりません。中にはまた一刻も早く育てようとあせつた挙句あげく、せつかく大事にしている野菜を枯らしてしまうものもあるくらいです。」

僕「ああ、そう云えば野菜畑にきょうも痩せた男やが一人、気違まいのような顔をしたまま、『間に合わない、間に合わない』と駈

けまわっていました。」

老人「それはさもありそうですね。新年の大市も直じきですから。

——町にいる商人も一人残ひとりらず血眼ちまなこになつていよう。」

僕「町にいる商人と云うと？」

老人「野菜の売買をする商人です。商人は田舎いなかの男女の育てた

野菜畑の野菜を買う、近海の島々から来た男女はそのまた商人の

野菜を買う、——と云う順序になつていふのです。」

僕「なるほど、その商人でしょう、これは肥ふとつた男が一人、黒

い鞆かばんをかかえながら、『困る、困る』と云つていふのを見ました。

——じゃ一番売れるのはどう云う種類の野菜ですか？」

老人「それは神の意志ですね。どう云うものとも云われません。

年々ねんねん少しずつ違ちがうようですし、またその違ちがう訣わけもわからないよ
うです。」

僕「しかし善いものならば売れるでしょう？」

老人「さあ、それもどうですかね。一体野菜の善悪は片輪かたわのき
めることになっていのですが、……」

僕「どうしてまた片輪などがきめるのです？」

老人「片輪は野菜畑へ出られないでしょう。従ってまた野菜も
作れない、それだけに野菜の善悪を見る目は自他の別を超ちようえつ越えつ
する、公平の態度をとることが出来る、——つまり日本の諺ことわざを使
えば岡目八目おかめはちもくになる訣わけですね。」

僕「ああ、その片輪の一人ですね。さつき髯ひげの生えた盲めくらが一人、

泥だらけの八つ頭やがしらを撫なでまわしながら、『この野菜の色は何とも云われない。薔薇ばらの花の色と大空の色とを一つにしたようだ』と云っていましたよ。」

老人「そうでしよう。盲めくらなどは勿論立派りっぱなものです。が、最も理想的なのはこの上もない片輪かたわですね。目の見えない、耳の聞えない、鼻の利きかない、手足のない、歯や舌のない片輪ですね。そう云う片輪さえ出現すれば、一代の *Arbiter elegantiarum* になります。現在人気物の片輪などはたいていの資格を具そなえていますかね、ただ鼻だけきいているのです。何でもこの間はその鼻の穴へゴムを溶かしたのをつきこんだそうですが、やはり少しは匂においがするそうですよ。」

僕「ところでその片輪のきめた野菜の善悪はどうなるのです？」

老人「それがどうにもならないのです。いくら片輪に悪いと云われても、売れる野菜はずんずん売れてしまうのです。」

僕「じゃ商人の好みによるのでしょうか？」

老人「商人は売れる見こみのある野菜ばかり買うのでしよう。」

すると善い野菜が売れるかどうか……」

僕「お待ちなさいよ。それならばまず片輪のきめた善悪を疑う必要がありますね。」

老人「それは野菜を作る連中はたいてい疑っているのですがね。じゃそう云う連中に野菜の善悪を聞いて見ると、やはりはつきりしないのですよ。たとえばある連中によれば『善悪は滋養じようの有無うむ』

なり』と云うのです。が、またほかの連中によれば『善悪は味あじわいにほかならず』と云うのです。それだけならばまだしも簡単ですが……」

僕「へええ、もつと複雑ふくざつなのですか？」

老人「その味なり滋養なりにそれぞれまた説が分れるのです。

たとえばビタミンのないのは滋養がないとか、脂肪のあるのは滋養があるとか、人参にんじんの味は駄目だめだとか、大根の味に限るとか……」

僕「するとまず標準は滋養と味と二つある、その二つの標準に種々様々のヴァリエーションがある、——大体こう云うことになるのですか？」

老人「中なかな々そんなもんじやありません。たとえばまだこう云

うのもあります。ある連中に云わせると、色の上に標準もあるのです。あの美学の入門などに云う色の上の寒温です。この連中は赤とか黄とか温い色の野菜ならば、何でも及第させるのです。が、青とか緑とか寒い色の野菜は見むきもしません。何しろこの連中のモットオは『野菜をすることごとく赤茄子あかなすたらしめよ。然らずんば我等に死を与えよ』と云うのですからね。」

僕「なるほどシャツ一枚の豪傑ごうけつが一人、自作の野菜を積み上げた前にそんな演説をしていましたよ。」

老人「ああ、それがそうですね。その温い色をした野菜はプロレタリアの野菜と云うのです。」

僕「しかし積み上げてあつた野菜は胡瓜きゅうりや真桑瓜まくわうりばかりでしたが、……」

老人「それはきつと色盲ですよ。自分だけは赤いつもりなのですよ。」

僕「寒い色の野菜はどうなのですか？」

老人「これも寒い色の野菜でなければ野菜ではないと云う連中がいます。もつともこの連中は冷笑はしても、演説などはしないようですがね、肚はらの中では負けず劣らず温い色の野菜を嫌っているようです。」

僕「するとつまり卑怯ひきょうなのですか？」

老人「何、演説をしたがらないよりも演説をすることが出来な

いのです。たいてい酒毒しゅどくか蠱毒ばいどくかのため舌が腐くっているよ
うですからね。」

僕「ああ、あれがそうなのでしよう。シャツ一枚の豪傑の向う
に細いズボンをはいた才子が一人、せっせと南かぼ瓜ちやをもぎりなが
ら、『へん、演説か』と云っていましたっけ。」

老人「まだ青い南瓜をでしよう。ああ云う色の寒いのをブルジ
ョア野菜と云うのです。」

僕「すると結局どうなるのです？　野菜を作る連中によれば、
……」

老人「野菜を作る連中によれば、自作の野菜に似たものはこと
ごとく善い野菜ですが、自作の野菜に似ないものはことごとく悪

い野菜なのです。これだけはとにかく確かですよ。」

僕「しかし大学もあるのでしょうか？　大学の教授は野菜学の講義をしているそうですから、野菜の善悪を見分けるくらいは何でもないと思いますが、……」

老人「ところが大学の教授などはサツサンラップ島の野菜になると、えんどう豌豆と蚕豆そらまめも見わけられないのです。もつとも一世紀より前の野菜だけは講義の中にもはいりますがね。」

僕「じゃどこの野菜のことを知っているのです？」

老人「イギリス英吉利の野菜、フランス仏蘭西の野菜、ドイツ独逸の野菜、イタリイ伊太利の野菜、ロシア露西亞の野菜、一番学生ににんき人気のあるのは露西亞の野菜学の講義だそうです。ぜひ一度大学を見にお出でなさい。わたしのこ

の前參觀した時には鼻眼鏡をかけた教授が一人、瓶びんの中のアルコ
オルに漬つけた露西亞の古胡瓜ふるぎゆうりを見せながら、『サツサンラップ
島の胡瓜を見給え。ことごとく青い色をしている。しかし偉大な
る露西亞の胡瓜はそう云う浅薄な色ではない。この通り人生その
ものに似た、捕捉ほそくすべからざる色をしている。ああ、偉大なる露
西亞の胡瓜は……』と懸河けんがの弁べんを振ふるっていました。わたしは当時
感動のあまり、二週間ばかり床とこについたものです。』

僕「すると——するとですね、やはりあなたの云うように野菜
の売れるか売れないかは神の意志に従うとでも考えるよりほかは
ないのですか？」

老人「まあ、そのほかはありますまい。また實際この島の住民

はたいていバツブラツブベエダを信仰していますよ。」

僕「何です、そのバツブラツブ何とか云うのは？」

老人「バツブラツブベエダです。BABRABBA DA と綴り
ますがね。まだあなたは見ないのですか？ あの伽藍がらんの中にある

……」

僕「ああ、あの豚の頭をした、大きい蜥蜴とかげの偶像ですか？」

老人「あれは蜥蜴とかげではありません。天地を主しゅさい宰するカメレオン
ですよ。きょうもあの偶像の前に大勢おおぜいお時儀じぎをしていたでし
よう。ああ云う連中は野菜の売れる祈祷の言葉を唱となえているので
す。何しろ最近の新聞によると、紐ニユウヨオク育ヨクあたりのデパアトメン
ト・ストアアはことごとくあのカメレオンの神しんたく託たくの下くだるのを待

つた後のち、シイズンの支度したくにかかるそうですからね。もう世界の信仰はエホバでもなければ、アラアでもない。カメレオンカメレオンに帰きしたとも云われるくらいです。」

僕「あの伽藍がらんの祭壇の前にも野菜が沢山積んでありましたが、

……」

老人「あれはみんな牲にえですよ。サツサンラップ島のカメレオンには去年売れた野菜を牲にえにするのですよ。」

僕「しかしまだ日本には……」

老人「おや、誰か呼んでいますよ。」

僕は耳を澄まして見た。なるほど僕を呼んでいるらしい。しかもこの頃蓄膿症ちくのうしょうのために鼻のつまった甥おいの声である。僕はし

ぶしぶ立ち上りながら、老人の前へ手を伸ばした。

「じやきようは失礼します。」

「そうですか。じやまた話しに来て下さい。わたしはこう云うものですから。」

老人は僕と握手した後、^{のち}悠然と一枚の名刺を出した。名刺のまん中には鮮かに^{あざや}Lemuel Gulliverと印刷をしてある！ 僕は思わ

ず口をあいたまま、茫然と老人の顔を見つめた。麻色の髪の毛に囲まれた、目鼻だちの正しい老人の顔は永遠の冷笑を浮かべている、——と思つたのはほんの一瞬間に過ぎない。その顔はいつか悪戯^{いたずら}らしい十五歳の甥の顔に変わっている。

「原稿ですってさ。お起きなさいよ。原稿をとりに来たのですっ

てさ。」

甥は僕を揺すぶった。僕は置火燵おきごたつに当つたまま、三十分ばかり昼寝をしたらしい。置火燵の上に載っているのは読みかけたの *ulliver's Travels* である。

「原稿をとりに来た？ どここの原稿を？」

「随筆のをですつてさ。」

「随筆の？」

僕は我知らずわれし ひとりごとひとりごと 言を云つた。

「サツサンラップ島の野菜市やさいいちには『はこべら』の類たぐいも売れると見える。」

(大正十二年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月10日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

不思議な島

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>